

## 同志社大学での講演（概要）

### 演題：[UAE 現地報告]

これからのグローバル人に必要なもの

—アーモスト大学留学経験とともに—

2014年9月24日

在UAE大使 加茂佳彦

#### 1. アーモスト留学で何を感じたか

1977年から79年まで2年間アーモストに留学した。美しいキャンパスと恵まれた施設。英語力のなさを痛感しつつ2年間懸命に図書館通いをした。リベラルアーツ・カレッジの神髄に触れ、知的好奇心を刺激することに主眼を置いた教育の素晴らしさに感動した。アーモストはアメリカの物質的豊かさとアメリカ人の自分自身への投資のすさまじさのショーケースだった。

同志社を築いた新島襄はアーモストでの留学経験から日本でのリベラルアーツ・カレッジ設立の大構想を得、やがてそれを実現させた。アーモストが新島に普遍的人権に根ざした国民国家建設という19世紀後半の時代精神を吹き込んだのではないか。開明的知識人の養成は国民国家建設の成否を担うものであり、南北戦争後のアメリカの知的空間としてのアーモストには時代の変化を先取りした空気が充満していたのだと思う。

#### 2. グローバル人の必須言語：英語

時代を先取りした空間を現代に求めるとすれば、ドバイ、アブダビを外せない。世界の人々にとって、京都が最も行きたい都市だとすれば、ドバイは最も多くの人が通過する都市でもある。このドバイ、アブダビを擁するUAEについて関心を示す日本人の数が少なすぎる。もっと目を向けるべき。

今日の世界では、民族国家の枠を超えてグローバル化が進行中。その何たるかを体感するにはUAEにまず来てみるのが手っ取り早い。世界中200カ国以上からやってきた人々が、多民族、多文化混交の場での仕事と生活を実践中。

その仕事と生活（グローバル・ビジネス）は非母国語英語による意思疎通を前提として廻っている。非母国語英語に日本語の言語空間並の精度を要求する必要はない。日本語は語感豊かな言語である。言葉遣いにより意思の伝達はもとより自分の微妙な心根を相手に伝え、また相手の心の襞まで感知することができる。この誠心地よい日本語環境に住む我々は、英語習得の目標値をあまりに高く据えてきた気がする。英語の専門家はさておき、これからは例えば6割の理解でがんがんに話す英語を目指すべきである。実際にこれからのグローバル社会は6割英語の世界だと言って良い。

インド英語、アラブ英語、アジア英語、ラテン英語など自己流の英語が飛び交うこの地

こそ、21世紀のグローバル社会の何たるかが実感できる生活空間であり、日本語体験との比較から我々の多くが被っていた神話（日本人の英語下手）からの呪縛を破るのに最適な土地である。

他方、この英語スキルは、21世紀の時代精神そのものであり、それを欠く者が被る機会コスト（機会の喪失）は甚大である。UAEは人類の近未来を写す共同体であり人類の希望の扉でもあるが、その扉を開ける唯一の必要条件が非母国語としての英語スキルの獲得である。因みにUAEでもそれぞれの母国語が話されないわけではない。ネイティブも非ネイティブも皆が自分流の英語で仕事や生活上の意思疎通をし、母国語で家族、友人と親しく語らうという分業が見られるということである。

### 3. UAE（世界のゲートウェイ）

UAEは豊富な石油資源をベースとし近代国家の建設に邁進している若い国家。UAE人の人口はUAE居住者の10%程度といわれており、90%が外国からUAEに働きに来た人々及びその家族から成っている。インド亜大陸、湾岸・中東、アフリカ、東南アジア、ロシア東欧、欧州、南北アメリカ等からの外国人居住者がサラダボールの中身のよう  
に混交し、働き、住む。そこに在勤して気付いたことや日本ではあまり知られていない地元の特徴を以下のキャッチフレーズを用いて説明したい。

- インチャラー（時間の不正確さに寛容、計画が苦手、住所の概念なし）
- 現場力あり（その時にいることの重要性、現場で解決、事前の約束に安住するな）
- 世界で最も働きたい国の一つ（グローバル人＝国際的出稼ぎ職能人の世界）
- 日本人青年のグローバル化入門のための手頃な訓練地（実践6割英語習得、外人との共存・競争）

以上